

令和5年度修士、専門職学位、博士学位記授与式告辞

本日、本学・大学院を修了される2,020名の皆さん、修了おめでとうございます。北海道大学を代表して、心からお祝い申し上げます。また、慣れない異国の環境の中で、言葉で言い尽くせない努力を重ね、本学を修了されます337名の留学生の皆さんに対しては、深い敬意を表し、更に大きな祝意をお伝えしたいと思います。

また、皆さんを支えてこられたご家族、関係者の皆様に対しても、心よりお祝いと御礼申し上げます。さらに、この間、本学へのご支援をいただいた方々には、この場を借りて、深く御礼申し上げます。

この機会に、皆さんの学んだ時期を振り返ってみたいと思います。皆さんが研究生生活を過ごした期間は、COVID-19によるPandemicのため、日常生活が大きく制限された約3年半と完全に重なっています。

皆さんを含めて、前後数年の学生が、このPandemicの影響を最も強く受けた学年です。実際、入学式や学位記授与式に代表されるような対面での行事がほとんど中止となりました。本来、高等教育の最重要な要素である学生同士や学生と教員のコミュニケーションは著しく阻害されました。また、大学院においては、緊密なコミュニケーション

が基盤となる研究活動に大きな影響がありました。その意味でも、こうして、制限なく、全ての修了生、そのご家族、関係者の皆様、教職員と一緒に、皆さんの門出をお祝いできることは、格別な喜びがあります。

この間、私たちを取り巻く世界情勢は劇的に変化しました。一つ一つを取り上げることとはしませんが、いくつかの出来事は、明らかに皆さんのこれからの生活に大きな影響を及ぼすものです。第一に、この数年間は、気候変動により、地球環境の持続可能性に対する脅威が明確に可視化されました。さらに、ウクライナ情勢では、世界の平和と秩序が極めて脆弱なものであることを思い知らされました。また、核戦争の現実味に世界が震えました。世界の終末を示すいわゆる終末時計の時間は、はこれまで最短の残り数分を示しています。

さらに、私たちの先人が歴史の教訓から築き上げてきた人道主義がいとも簡単に崩れる現実をパレスチナで目撃することになりました。

科学技術の発展を見ると、生成系 AI が登場し、私たちの日常生活に人間以外の知性が入り込むことになりました。人類が生まれて以来、数百万年続いてきた人類の歴史における人間の知性のあり方に対して大きな衝撃を与えています。

3月29日に日本でも公開されると聞いていますが、原子爆弾の開発の中心になったロバート・オッペンハイマー博士の生涯を描いたアカデミー賞受賞の映画「オッペンハイマー」を、先日、見る機会がありました。この映画で示されたように、私たちは、今、

オッペンハイマー博士らがロスアラモス国立研究所で約 80 年前に開発した核の時代に生きています。映画は、このオッペンハイマー博士の苦悩を描いていますが、これは、私たち、科学と先端技術に関わる、全ての者が向き合わざるを得ない重い課題でもあります。

そして、この数年間に世界を席卷している人工知能も後世必ずや、世界の在り方の根幹を大きく変えた科学技術として振り返られるはずです。それが、原子爆弾を生み出した核分裂技術と同様に厳しく評価されるか、あるいは、その後の世界の繁栄と平和に寄与したものとして高く評価されるようになるかは私たちの手に委ねられています。中でも、ここにいらっしゃる若い皆さんにかかっています。

さらに、我が国を見ると、「失われた 30 年」という言葉で代表されるように、世界での評価の中で、日本の順位の低下が具体的な評価において顕著となった数年間でもありました。私たち、大学やアカデミアを見ても、日本の科学技術力は大きく低下して、世界での存在感は希薄になりました。

さらに、少子化と超高齢化社会という、明確な打開策のない困難な課題が、日本の行方に暗い影を落としています。

こうして皆さんが大学で過ごした数年を振り返ると、こうした世界の変化に共通するのは、先行きの見えない不透明感と不確実性でした。

こうした状況の中で、昨年7月、北海道大学は、2030年に向けた新たなビジョン、「HU VISION 2030」を発表しました。世界が不確実で不透明だからこそ、私たちは、その不安定さに振り回されることのない、力強いビジョンを持つ必要がありました。

その中心的なビジョンは、大学が、教育・研究の卓越性・Excellenceを通じて、社会展開力・Extensionの起点、すなわちイノベーションの起点となるという新しい大学像です。そして、この「HU VISION 2030」実現に向けた最も重要なアクションの一つが、この不透明で不確実なVUCA社会を変革する力を持ったグローバル人材の育成です。

グローバル人材の育成の観点から、基幹総合大学である北海道大学において、大学院における教育・研究は特に重要なものです。そして、その出力である、優れた大学院生を如何に生み出すかは、大学の存在意義が問われる大きな課題です。

日本における大学院生の意義が、欧米と比べて、十分に評価されていないことは、明治以来の日本の大学の課題でした。この問題は、未だに解決されていません。しかし、先程述べたように、科学技術において日本は世界から大きく劣後することになりました。その原因の一つは、日本において、高度な研究力を持った大学院生の数が減少し、また、大学院生が企業や社会で活躍する仕組みが欠如し、成功例と言えるロールモデルがあまり生まれなかったことが挙げられます。

本学の大学院では、言うまでもなく、専門的知識や研究力の強化を目指しています。

しかし、これに加え、大学院で身につけた専門的知識や研究力が社会課題の解決に資するために必要な Transferable Skill の獲得ができる大学院改革も目指してきました。

皆さんは、これまで本学で学んだ専門知識に加えて、これからの人生や仕事において必要な transferable competence を学んだはずです。これは、北海道大学の4つの基本理念である「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」そのものです。世界の行く末が、どれほど不透明で不確実であっても、皆さんがこの4つの基本理念から得た専門知識と広範な適応能力をもってすれば、必ず、未来を創造するフロンランナーになれると確信しています。

本日の学位記授与式の最後に、本学の礎を築いた、北海道大学初代教頭である W.S. クラーク博士の人生について、皆さんと一緒に確認したいと思います。なぜなら、彼の生き方は、150年の時間を経てもなお、この2024年の私たち、あなたたちの生き方に対する大きな inspiration であり続けているからです。

クラーク先生は、今から約150年前に、アメリカ東海岸、ボストンに近い、マサチューセッツ農科大学の学長という揺るぎない高い地位にいました。そして、1876年、彼は、明治政府の依頼を引き受け、アメリカ大陸を横断し、命を懸けて太平洋を渡り、東京で英語を学んだ学生13名と共に、200年余りの鎖国により世界から遮断された極東の小国、日本、しかもその日本の最北の地、北海道にやってきます。当時の明治政府は

まだ極めて不安定であり、また、当時の極東の地政学的状況は今以上に不透明でした。

そんな時代に、クラーク先生がなぜ札幌農学校という小さな可能性に彼の大切な晩年を賭けたのかは、どう考えても、私には、理解することのできないものです。

札幌農学校の礎を築くというミッションを成し遂げると、彼は、「Boys, be ambitious, like this old man!」という、実にシンプルで、心に突き刺さるメッセージを残して、札幌を去ります。その後、帰国したクラーク先生は、事業を起こしますが、不運も重なり、不遇のうちに、59才で、生涯を終えたとされています。

しかし、これらのことから私たちが明確に読み取れるのは、彼の人生が、生涯を通じて、チャレンジそのものであったという事実です。クラーク先生の生涯は、学術や教育に留まらず、世界・社会を変えようとし続けたものであり、彼自身の言葉通り ambition に満ちた果敢な人生でした。

そして、クラーク先生と彼に同行した教師たちが目指したグローバル人材育成の結晶が、新渡戸稲造であり、内村鑑三であり、宮部金吾です。そして、こうした先人の DNA を受け継ぐ後継者が、ここにいる皆さん一人一人です。

皆さん、今日の学位授与式の終了後、是非、もう一度、中央ローンにある日本で最も良く知られている胸像であるクラーク像に立ち寄ってください。そして、彼の挑戦に満ちた ambitious な人生へ思いを巡らせてみてください。

皆さんは、私たちの最高のロールモデルであるクラーク先生の「Be ambitious」の精神を胸に、学びを続け、挑戦を続け、勇気をもって、この困難な時代を堂々と歩んでください。

修了生の皆さんのご健康とご活躍を心から祈念して、私の結びの言葉といたします。